

2023/12/05

愛媛新聞デジタル報道部・今西 晋

## 山本武利先生帰郷講演会のご報告

貴下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。曾我正堂『ふる郷もの語』（文生書院）の刊行を記念し、山本武利先生がふるさと八幡浜市で「宇和人の誇り」と題して講演されましたので、ご報告申し上げます。

日時：12月2日（土）午前10時～午前11時半

場所：八幡浜市民文化活動センター コミカン（八幡浜市本町）

参加者：地元の歴史愛好家や山本先生のご親族、同級生、縁者ら約50人



### 【講演内容】

曾我健さんがまとめた祖父曾我正堂の著書に初めて手にしたとき、大変な掘り出し物だ

と思った。これが契機となって八幡浜、宇和、南予地方のことを振り返ることが多くなり、故郷を研究するということが自分の最後の仕事としてふさわしいのではないかという気持ちが湧いてきた。そこで『ふる郷もの語』に特別寄稿文を書いたり、編集者にもアドバイスしたりして出版をサポートした。

正堂さんはいい意味での宇和人。われわれ郷土の人間がこういう人を知らずして郷土は語れない。品性のいいジャーナリスト。立派な業績を上げてきたと思っている。まずは八幡浜で、松山で、ゆくゆくは日本全国で「宇和に曾我あり」と広めてゆきたい。

この本が描いたのは、独立自営農民の姿。明治期に徳富蘇峰というジャーナリストがいたが「日本は農村を動かしている人たちが産業を担わせなければだめだ」と説いた。イギリスの経済史では、産業革命を起こしたのはヨーマンという、独立自営農民たちだった。田舎紳士と馬鹿にされるけれども、日本でもそういう人たちが産業発展を支えていくだろうと。曾我家の人たちは貴族階級＝ジェントリーではなくヨーマンとして農業や産業、共同体を支えた。宇和の鳴山（しぎやま）の人たちが農地を開拓し、段々畑をつくり、肥料を作って水をやる、地道な日常作業で農村を支えていたことが本書で生き生きと描かれている。

曾我家は戦後の農地改革で没落したが、その時正堂は地主と小作人の間を調停する役割も担った。農地改革の被害者でありながら、共同体のために尽くした。立派な人だったと思う。

なぜ戦前農村に貧富の差ができたのかについても正堂は触れている。明治を振り返ると貧しいが平等だった。大正昭和で変化したのはなぜか。それは養蚕業の勃興です。桑の経営に入ったから。農業の変動が激しくなった。全体的には豊かになったが、世界的に激しく動く養蚕経営に手を出したがために貧富の差ができ、人々の心が変わっていった。正堂はそのあたりをよく見ている。

権力に対する鋭い批評性もこの本の特長。出征兵士に贈る防弾チョッキとして女性が千針を作ることは意味がないとはっきり書いている。軍部は盛んに増産をやれといいながら、農村に必要な労働力だった若者を中国の戦地に送る。こんな矛盾する政策がなぜ実行されたのだろうか。これは大変勇氣ある言動ですね。だから官憲ににらまれる。いい意味でのナショナリズム、国を愛することには変わりがないが、ソフトで鋭い批評。都会のジャーナリストはこうした指摘はなかなかできない。

正堂は正直だが貧しかった。こうした人物を生んだ宇和人というのは、誇り高き伝統を受け継いでいる。郷土の先人たちの業績を受け継いでゆかねばならない。

以上